

武藏野日曜集会

わが水

——ヨハネ伝第4章1～26節——

小池辰雄

1994年6月5日

告白的表現 神・キリストとの関係が立っていること 碎けたる魂 靈の貧しき者 神の賜物
とは聖靈のこと 神交 私は信仰なんかない キリストの靈に在つて拝せよ 一如の関係 庄
倒されている現実

【ヨハネ4・1～26】

¹主、おのれの弟子を造り、之にバプテスマを施すこと、ヨハネより多しと
パリサイ人に聞こえたるを知り給いし時、²（その実イエス自らバプテスマを
施ししにあらず、その弟子たちなり）³ユダヤを去りて復ガリラヤに往き給う。
⁴サマリヤを経ざるを得ず。⁵サマリヤのスカルという町にいたり給えるが、
この町はヤコブその子ヨセフに与えし土地に近くして、⁶此処にヤコブの泉あり。
イエス旅路に疲れて泉の傍らに坐し給う、時は第六時頃なりき。⁷サマリ
ヤの或女、水を汲まんとて來りたれば、イエス之に『われに飲ませよ』と言
いたもう。⁸弟子たちは食物を買わんとて町にゆきしなり。⁹サマリヤの女い
う『なんじはユダヤ人なるに、如何なればサマリヤの女なる我に、飲むこと
を求むるか』これはユダヤ人とサマリヤ人とは交りせぬ故なり。¹⁰イエス答
えて言い給う『なんじ若し神の賜物たまものを知り、また「我に飲ませよ』という者
の誰なるかを知りたらんには、之に求めしならん、然らば汝に活ける水を与
えしものを』¹¹女いう『主よ、なんじは汲む物を持たず、井は深し、その活
ける水は何處より得しそ。』¹²汝はこの井を我らに与えし我らの父ヤコブより
も大いなるか、彼も、その子らも、その家畜も、これより飲みたり』¹³イエ
ス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渴かん。』¹⁴然れど我があ
たうる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は彼の中に泉と
なり、永遠の生命の水湧きいづべし』¹⁵女いう『主よ、わが渴くことなく、
又ここに汲みに来ぬために、その水を我にあたえよ』¹⁶イエス言い給う『ゆ
きて夫をここに呼びきたれ』¹⁷女こたえて言う『われに夫なし』イエス言い
給う『夫なしというは宜なり、』¹⁸夫は五人までありしが、今ある者は、なん
じの夫にあらず。無しと云ふは真なり』¹⁹女いう『主よ、我なんじを預言



者とみとむ。²⁰ 我らの先祖たちは此の山にて拝したるに、汝らは拝すべき処をエルサレムなりと言う²¹ イエス言い給う『おんなよ、我が言うことを信ぜよ、此の山にもエルサレムにもあらで、汝ら父を拝する時きたるなり。』²² 汝らは知らぬ者を拝し、我らは知る者を拝す、救はユダヤ人より出づればなり。²³ されど真の礼拝者の、靈と眞とをもて父を拝する時きたるなり。今すでに来れり。父は斯のごとく拝する者を求めたもう。²⁴ 神は靈なれば、拝する者も靈と眞とをもて拝すべきなり』²⁵ 女いう『我是キリストと称うるメシヤの來ることを知る、彼きたらば、諸般のことわらに告げん』²⁶ イエス言い給う『なんじと語る我はそれなり』

●告白的表現

私はいわゆる聖書の解釈というようなことをここにするわけではない。私は聖書を身体で読んで、その告白的表現をする。聖書について解釈するのではない。聖書に即して、自分の問題として、告白的な表現をする。これが私のこの集会の精神ですから、そのおつもりで。聖書解釈なら、解釈の本はいくらでもありますから、そういうのをお読みになれば結構です。聖書自身が告白なんです。筆者が告白している。信仰を説明しているのではない。告白とは大事なことで、告げ白す、体験を語るということです。皆さんも、そういうつもりで、聖書を自分の告白と相通ずるものとしてお読みになるのが一番いい。それを日蓮の言葉でいうなら、「身読」、身体で読むということです。日蓮は

「法華經を身読せよ」

と弟子たちに言つた。さすがは日蓮です。

ゲーテは、

「自分の書いたものは全部告白である」

と言つた。さすがはゲーテです。ゲーテの文学がなぜ素晴らしいかというと、彼は体験からものを言つてゐる。頭で書いたものはひとつもない。だから、ゲーテの文学は凄い。私は『ファウスト』を愛読してます。『ファウスト』は世界の最大文学の一つです。

●神・キリストとの関係が立つてゐること

それではヨハネ伝に入ります。

¹ 主、おのれの弟子を造り、之にバプテスマを施すこと、ヨハネより多しと
　　パリサイ人に聞こえたるを知り給いし時、

「ヨハネ」とは洗礼のヨハネのこと。「パリサイ人」というのは、モーセの律法を非常によく知つていて自分で実践しているということを誇つてゐるご連中です。だから、パリサイ根性というのは、自己義認して高ぶつて人を批判するような精神をいう。



² (その実イエス自らバプテスマを施ししにあらず、その弟子たちなり)

キリストは地上にあるときにバプテスマを施さない。洗礼のヨハネは水に浸してバプテスマをしていた。キリストもそれに従つて水の中に全身を浸して、洗礼のヨハネからバプテスマを受けた。事実、彼はそれをした。けれども、彼が水の中に入つて、起き上がつたら、「御靈が鶴の如く天より降つてその上に止まつた」と書いてある。さすがはイエスです。聖靈が鶴の形で彼の上に降つた。鶴は靈鳥だね。鶴は平和の象徴である。

本当の平和はそのもとに平安がなければダメです。平安ということが大事です。平安といふのは、神さまやお釈迦さんとの関係が垂直に立つこと、そこに平安がある。人間の間の平和といふのは、この平安がなければ本当の平和はこない。平安は縦の関係で、平和は横の関係です。人間の関係は横の関係だから、個人的な関係にしろ、社会的な関係にしろ、国際的な関係にしろ、仲良くやつていくのは平和ということです。そのためには、この縦の関係、神・キリストやお釈迦さんとの関係が立つていてこと、それが平安です。仏道でいうならばお釈迦さん、キリスト道でいえば神・キリストとの関係です。

関係が立つとはどういうことですか。関係が立つためには、福音の世界では、自分は平伏さなければダメです。自分はキリストの前に平伏す。そうすると、この平安の関係にある。けれども、それではまだ本当は足りない。平伏して、そしてキリストの中におどり込む、キリストの中に入る。キリストと一つになる。キリストの中に入つてキリストと一つになつたときに、これが本当の平安です。

● 碎けたる魂

だから、私は「信仰」という言葉は嫌いだ。

「私は信仰なんかありません」

と言う。私は「信仰」なんてものはまだつこくて嫌いだ。私はこの平安の世界、キリストと一つにならなければ、私の現実はない。

「そうですか、先生はそんなに偉いのですか」

なんて、そうではない。偉くないから入る。ダメだから入つていく。ダメだから、キリストはダメな人間を無条件に入れる。無条件に入れてくださるのはキリストの他にない。人間というのはいつも条件をつける。

「でもまだよく勉強してないのではないか、よく聖書を讀んでないではないか」と、何か理屈をつけて人を批判する。キリストは無批判なんです、

「ああ、来なさい」

と仰る。ただし、入つていくには、平伏さなければ入れない。高ぶつた氣持の者はサタンの弟子だから、



「お前はサタン（悪魔）の方へ行け。私の所に入ろうとするものは平伏しの魂でなければ入れない」

と言われてしまう。

「碎けたる魂」ということが詩篇51篇にある。そうすると、「そうですか、私はなかなか魂が碎けませんで困ります」なんて。それはそうだよ、誰だつて。

「神のもとめたもう祭物はくだけたる靈魂なり。神よなんじは碎けたる悔いしこころをかろしめたもうまじ。」（詩篇51・17）

と。何か供物をもつていくのではない。

「碎けたる魂そなえものが供物だ」

という。

「神よなんじは碎けたる悔いしこころをかろしめたもうまじ」と、そのとおりです。詩篇51篇は大事な詩篇です。

「ああ神よねがわくはなんじの仁慈いっくしみによりて我をあわれみ、なんじの憐憫あわれみのおきによりてわがもろもろの愆とがをけしたまえ。わが不義をことごとくあらざり我をわが罪よりきよめたまえ。」（詩篇51・1～2）

旧約ではこうやって祈るけれども、新約ではキリストが私たちの罪を全部引き受けてしまつて、

「お前の罪は私が全部引き受けてしまつたぞ」ということです。「お前の罪」とは、私たちは自我があるということ。自我、自我心、自己肯定が「罪」なんだ。どんなに立派な人でも、自己肯定しているのは福音的に罪なんだ。キリストは完全に自己否定の人間です、己を何ものともしなかつた。

●靈の貧しき者

いわゆる山上の垂訓の第一言に、

「惠福なるかな、心の貧しき者」

とある。あの「心」という字は本当は「靈」という字です。

「惠福なるかな、靈の貧しき者。天国はその人のものなり」ということです。

「靈の貧しき者」とは自分を何ものともしない者ということ。神さまが愛をもつて支配しているところが「天国」です。キリストにとつては天国は神さまだから、キリストはいつも天国人なんです。本当の天国人はキリストの他にいない。ということは、神一切にしているから。キリストは神一切で、自分はゼロにしている。そうすると、これが無限大になる。

「ゼロ＝無限大」（0＝∞）



とはイエス・キリストのことです。神という無限大がこのゼロの中に入つてくる。だから、彼の語る言葉は全部神の言葉で、彼の行為は全部神の行為である。それを「義人」という。

「義人なし、一人だなし」

とパウロが言つた。「義」というのは正義ということではない。神さまとの縦の関係が完全に立つてることを義といふ。

「キリストの他に義人はいない、神さまとの関係がちゃんと立つ人はいない」ということです。「愛と義」という言葉があるが、この義は対立している義ではない。

洗礼のヨハネは水のバプテスマをしたが、イエスは聖靈のバプテスマをなさる。

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて來れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。」（ルカ12・49～50）

とある。

「我には受くべきバプテスマあり」とは十字架のことです。

「そうしたら、お前たちに今度は聖靈のバプテスマをするぞ」

と。キリストは地上ではバプテスマしない。キリストのバプテスマは聖靈のバプテスマだから。聖靈を私たちに与えることが「水を注ぐ」ことです。今日の主題の『わが水』というキリストの水は聖靈、靈水のことです。聖靈というのは何ものにも代えられない。私たち聖靈をとつたら、もぬけのからになつてしまふ。

●神の賜物とは聖靈のこと

³ユダヤを去りて復ガリラヤに往き給う。⁴サマリヤを経ざるを得ず。

エルサレムから北の方です。まん中にサマリヤがあるから、

⁵サマリヤのスカルという町にいたり給えるが、この町はヤコブその子ヨセフに与えし土地に近くして、⁶此処にヤコブの泉あり。イエス旅路に疲れて泉の傍らに坐し給う、時は第六時頃なりき。⁷サマリヤの^{ある}或女、水を汲まんとて来りたれば、イエスに『われに飲ませよ』と言いたもう。

ちょうどお昼頃です。暑いからキリストも喉がかわいて、「飲ませてくれ」と言つた。

⁸弟子たちは食物を買わんとて町にゆきしなり。⁹サマリヤの女いう『なんじはユダヤ人なるに、如何なればサマリヤの女なる我に、飲むことを求むるか』これはユダヤ人とサマリヤ人とは交りせぬ故なり。

ユダヤとサマリヤは仲が悪い。サマリヤというのいろいろな人種が混ざつていて混合的なんです、余り純粹でない。ユダヤはユダヤ人だけです。それで仲が悪い。キリストはそんな区別なんかしませんから、混血であろうと何であろうと一向差し支えない。サマリヤ



のある女がすぐそういった区別をして、

「あなたはユダヤ人でサマリヤとは仲が悪いのに、なぜサマリヤの女の私に水をくださいなんて仰るのか」

と。ユダヤ人は血統を重んずる。

「アブラハムの子、イサクの子……」

なんてやつて系統を重んずる。サマリヤはゴタゴタしている。だから、

「なぜそんなゴタゴタのサマリヤの女に水をくれなんて仰るのですか、もともとユダヤと交わりをしないのではないですか」

というわけです。

¹⁰イエス答えて言い給う『なんじ若し神の賜物たまものを知り、また「我に飲ませよ』という者の誰なるかを知りたらんには、之に求めしならん、然らば汝に活ける水を与えるものを』

「神の賜物」とは聖霊のことです。聖霊から発するところのいろいろな恵み、それを賜物とパウロは言つてゐるけれども、聖霊そのものをここではキリストは賜物と仰つた。これは単数です。聖霊からくる賜物は複数になる。

「お前がもし神の賜物が何であるかを知り、また「我に飲ませよ」というこの私が誰であるかを知つたら、逆に私に求めたのに。そうしたら、活ける水をお前にやるのに』

と、生き生きと会話が書いてある。ところが、この「賜物」をサマリヤの女は知りっこない。

¹¹女いう『主よ、なんじは汲む物を持たず、井は深いどし、その活ける水は何処より得しそ。¹²汝はこの井を我らに与えし我らの父ヤコブよりも大いなるか、彼も、その子らも、その家畜も、これより飲みたり』¹³イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渴かん。¹⁴然れど我があたうる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は彼の中に泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』

この14節のキリストの言葉は大事です。これは靈水、聖霊のことです。聖霊は水に例えられたり、火に例えられたりする。火の如しとか、水の如しとか。「水火相容れず」というが、聖霊の世界は、水火相容れている。

● 神交

我々の神交の現実は、信じ仰いで（信仰）いるような呑気な世界ではない。神との交わりの世界です。神との交わりは、私たちはキリストとの交わりをまずしなければダメです。だから、私は

「エン・クリスト」（キリストの中に）



と言う。キリストの中に入る。それが神交なんです。我々は神さまに直接交わることはできない。キリストが媒介です。キリストが我々の自我を完全に引き受けて、罪を贖つてくださった。罪を贖つてくださったから、私たちはキリストの中に平伏して入れるわけです。誰でも無条件に入れる。

「私はキリストと一つなり」

ということが言えるわけです。言えなかつたら本当はダメなんです。偉くなつたから一つになつたわけではない。ダメだから入れる。ダメだから、キリストは入れてくださる。そうすると、それが本当の神交の世界です。信じ仰いでいるような呑気なものではない。そんな「信仰」は要らない。キリストの中に入る「神交」でなくては。

「信仰は要らない」

なんていう人はいないだろうね。普通は、

「信仰は大事です。あなた方はしつかり信仰をもちなさい」

なんて言つてゐる。私みたいな单刀直入にグツと言ふひとは恐らくいないね。それは本当の現実をもつていなかから。説明しているような世界で、告白でないから。私の活かされている現実は聖靈の現実です。聖靈はいろいろな力をもつてゐる。力も智慧も光も愛も生命も何でももつてゐる。聖靈というのは大変な靈だ。

「聖靈」という言葉は非常に躊躇になる。

「困つたな、聖なる靈だから」

なんて、みなそれで聖靈を敬遠してしまう。キリストが

「賜物を与える」

と言うのは、この聖靈のことです。

「私は賜物を与えるために來た。地上ではできない。私が受くべきバプテスマ、十字架に架かつたら、お前たち祈つて待つていろ。聖靈が降るから」

と。それでペントコステでみなひつくり返つた。キリストの弟子になつたのは、あの聖靈を受けてからです。聖靈を受けなければ本当の弟子になれない。地上でいくらキリストと一緒にご飯を食べたってダメなんだ。

●私は「信仰」なんかない

もうこんな「信仰」は要らない。キリストが

「信仰薄きものよ」

なんて仰るから、

「では、信仰を厚くしなければいかん」

なんて思う。キリストの言葉に躊躇いたらダメですよ。私はキリストに、

「私は信仰なんかありません。あなたがあるだけです。自分の信仰なんかありません



ん

と言つてやる。福音の世界はみな語り伝える世界です。書かれたものは音がないから、書かれたものを読むより録音を聞いた方がいい。だから、集会には来なければダメだということです。書いたものを読むだけではダメだ。集会で気合がかかった話の、靈的な気合が通じないからね。

¹³イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渴かん。¹⁴然れど我があたうる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は彼の中に

て泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』

この14節が大事です。さすがはイエス・キリストの言葉だ。こんな言葉はイエスでなれば言えない。「わが与うる水」とは聖霊のことです、靈水です。靈水を飲んだら、永遠に渴かない。逆に、泉となつて永遠の生命の水がその人から湧き出る。これは愉快な言葉だ。渴きを知らないという。何しろ、キリストと一つにならなければ、「聖霊の水」なんて言つたつて觀念になつてしまふ。キリストと本当に一つにされたら、

「はい、聖霊の水が私の中から湧いていますよ」とはつきり言えますから。

「聖霊の水とはどういうものだろうか?」

なんて考えたつてダメだ。キリストと一つになることが先ず根底ですか。「エン・クリスト」(キリストの中)です。キリストの中に入れば、あらゆることがそこから始まる。

「私は信仰なんかない」

と言つている。「神交」、神との交わりということです。神との交わりは「エン・クリスト」、キリストの中に入れれば、この神交が一つで、「私の信仰」を問題にしなくていい。よく

「あなたの信仰は?」

なんて言う。キリストが

「信仰うすきものよ」

と言うから、

「それでは私は信仰を厚くしなければいかん」

なんて思う。そんなことをしたら、くたびれてしまう。あのキリストの言葉に躓かなくていい。

「私は信仰なんかありません。私はあなたの中に入ります」

とはつきり言えばいい。エン・クリストです。そうしたら、この神交は自然にできてしまう。キリストの中に自分を投げ入れなければダメです。投身が大事なんです。「信仰」は、こんな觀念的なものはいらない。冥想して祈つて、自分をキリストの中に投げ入れる。「祈り入る」とはそのことです。祈入するとはキリストの中に投身することです。キリストと一つになつたら、何でも始まる。これは大事なことです。今のクリスチヤンはそういう靈的な現実



をもたないからダメだ。

十字架が土台です、間違えてはいけませんよ。キリストの十字架で、

「われキリストと共に十字架せられたり。我らはや生くるにあらず。キリスト

わがうちに在りて生きたもうなり」

とパウロが言つた。何ですか、「キリストわがうちに」とは。

「御靈のキリストが、キリストの聖靈がわが内で生きておられる」

ということです。あのガラテヤ書2章22節のパウロの告白が大事なんです。パウロというのは初めはキリストに反抗していただけれども、これがひっくり返つたら、最大の弟子となつた。あんな鮮やかな転向は他にない。

「わが目より鱗うろこの如きもの落ちたり」

と。新約聖書のパウロはよく読まないとね。パウロをよく読んでないと、福音書が本当は読めない。

●キリストの靈に在つて拝せよ

¹⁴然れど我があたうる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は

彼の中に泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』

「わが与うる水は彼の中に泉となり」

と書いてあつたら、「彼」を「汝」と読まなければダメです。彼という第二人称でなく、「汝よ」と二人称でものを言つてはいる。聖書の読みかたというのは、いつも我と汝の関係において読まなければダメです、三人称では。

「私の与える水を飲むお前は、永遠に渴くことがない。私が与える水はお前の中で
泉となつて、永遠の生命の水が湧きでるぞ」

ということです。

¹⁵女いう『主よ、わが渴くことなく、又ここに汲みに来ぬために、その水を
我にあたえよ』¹⁶イエス言い給う『ゆきて夫をここに呼びきたれ』¹⁷女こた
えて言う『われに夫なし』イエス言い給う『夫なしといふは宜なり、¹⁸夫は
五人までありしが、今ある者は、なんじの夫にあらず。無しと云ふは真なり』¹⁹
キリストはちゃんと見てはいる。

¹⁹女いう『主よ、我なんじを預言者とみとむ。²⁰我らの先祖たちは此の山にて拝したるに、汝らは拝すべき処をエルサレムなりと言ふ』²¹イエス言い給
う『おんなよ、我が言うことを信ぜよ、²²我が言ふことを受け取れ』ということです。

「我が言ふことを受け取れ」ということです。
此の山にもエルサレムにもあらず、汝ら父を拝する時きたるなり。²²汝らは
知らぬ者を拝し、我らは知る者を拝す、救はユダヤ人より出づればなり。



我らは預言者から伝わって、ちゃんと知つてゐるもの、本当の神さまを拝してゐると。特に旧約の預言者、イザヤ書です。イザヤ書53章は大事なところです。

²³されど真の礼拝者の、靈と眞とをもて父を拝する時まことにたらん、今までに來れり。父は斯かのごとく拝する者を求めたもう。²⁴神は靈なれば、拝する者も靈と眞とをもて拝すべきなり

これは大事な言葉です。「眞」というのは、ルターは「ヴァールハイト」と訳しているけれども、「アレーティア」というギリシア語です。「靈」はもちろん聖靈のことです。「眞理」という言葉は観念的な言葉だけれども、ギリシア語のアレーティアという字はそんな観念的ではない。真理の実体はキリストなんです。

「キリストの靈に在つて拝せよ」

ということが、この

「靈と眞とをもて拝すべし」

の本当の意味です。キリストに在つて（エン・クリスト）拝す。

「我に在つて拝せよ」

ということ。我々が祈る時に最後に「み名に在つて祈ります」と言つう。

「み名の中で祈ります」

ということです。

「…に在つて」

ということが大事なんです。有ではなく在です。

●一如の関係

²⁵女いう『私はキリストと称うるメシヤの来ることを知る、彼きたらば、

諸般もうもろ

のことを我らに告げん』²⁶イエス言い給う『なんじと語る私はそれなり』

「お前と語つてゐる私だよ」

と、これが本当の訳です。「私はそれなり」とはちょっと一段構えの訳になつてゐるけれども。

「エゴ・エイミ」「私だよ」

と書いてある。キリストを見ていて、この女は見えてない。

「あなたはちょっと普通の人と違いますね」

くらいは感じなければダメなんだ。ちょっとどころではない、大違ひだ。

そして、27節から非常にいきいきと劇的に書いてある。聖書は現実を伝えてるので、説明している本ではない。現実を語つてゐる。聖書の説明や解釈はもう御免こうむる。それよりも、聖書をただ読んでいればいい。この14節はあなた方自身がキリストに、

「あなたがくださつてゐる水を私は飲んでいますから、永遠に渴くことがありますね。私の中から泉のように永遠の水が湧いています」



と答えたらしい。聖書はいつも、一人称、二人称で読むんですよ、三人称ではダメです。一人称、二人称に直して読んでいく。他人ごとではないんだから。一対一の関係です。しかも、これは本当の関係は、一如の関係です。

「我が汝か、汝が我か」という、

「私はあなたの中にいるではないですか、あなたは私の中にいらっしゃるではないですか」という関係です。

●圧倒されている現実

「ありがたくてしようがありません、力が来てしようがありません、光が来てしようがありますん」

という、圧倒されている現実です。キリストに圧倒されているから、私は疲れを知らない。眠くはなるよ、肉体的に。しかし、

「ああ、今日は疲れた。もう飽きた」とか、そんなことはないんだ。

ナポレオンがセントヘレナに流されて、福音書を読んだ時に、「福音書は本ではなかつた、生き物であつた」と言つた。さすがはナポレオンだ。彼は最後に本当にその世界に入つて、天国に連れていかれただろうね。

どんな本を読むときにも、聖靈の光で読みなさいよ。そうすると、その本に書いてある以上のことをそこで読みやぶつてしまふ。眼光紙背に徹するというのはそのことなんです。ダンテの『神曲』やゲーテの『ファウスト』をそれで読んだら凄いことになる。そういう読み方は普通はできない。ユゴーの『レ・ミゼラブル』は素晴らしい小説だ。涙が出るよ。あのコゼットという少女は宝のような少女だな、ジャンバルジヤンの気持を動かすようなひとだから。

若い人は東西の第一流の古典をよく読まないといかん。老子は凄い。これは宇宙的です。「道の道無きを道という」とある。道の無いのが本当の道だと、一番先に書いてある。「これが道だ」といつて道を限定したら、それだけのはなし。無限定の世界でなければダメなんです。無道の道、道無き道。日本人は本当は道の人なんです。よく歩くんだ。自分の足でもつて、道のない所を自分で道を造りながら歩いていく。それが本当の道なんだ。これが無道の道、あるいは無路の路という。



あなた方は晴れた夜に空を仰ぎますか、星を見ますか、宇宙の星の輝きを。鶏のように地面をあさつてているようなことでは魂はダメです、空を仰いでいないと。とにかく、

「聖書は楽しくてしようがない。他のどんな小説よりも楽しくてしようがない」

ということにならなければウソだよ。本当に聖書を読んではいないね、聖書を楽しく読まなければ。

「聖書は難しい」

なんて、ひとつも難しくない。こんなに楽しい本はない。光が来てしようがない、力が来てしようがない。私の聖書には全部線が引つ張つてある。読んでないところはない。創世記から默示録まで全部、線が引つ張つてある。この聖書が二回目かな。ある聖書は破つてポケットに入れて電車の中で読んだ。

私はまだ90歳だけれども、私はこれからもう歳を数えるのをやめた。

「いつまで生きるか」

ではない。永遠の生命だから。「いつまで」ではない。終りを知らない生命だから。

ヒルティは

「時間を気にするな」

と言つて、時計を持たなかつた。青年が読む本としては、ヒルティの書いたものは非常に大事な本だ。イスの珍しい人です。とにかく、あなた方は第一流のものを相手にしてください。

